

資料・研究ノート

東南アジアにおける村落の構造

——特に双系制について——

口 羽 益 生\*

A Note on the Village Structure in Southeast Asia

by

Masuo KUCHIBA

I 村落の構造研究 —一つの視点—

東南アジア地域の村落にかんする intensive な人類学的研究が活発に行なわれはじめたのは、約20年前からであるが、これらの調査報告を比較検討すると、自然条件や民族文化にかなりの相違が認められるにもかかわらず、社会的諸特徴において、基本的な類似が見出される。これらの類似点を基底から支える固有の構造原理を明らかにすることができないものであろうかという問いを筆者は以前から抱いていたが、以下、気づいた若干の事柄を覚書として書き留めておきたい。

東南アジアにおける村落は、自然条件と自然に対する生態学的適応技術の組み合わせや異質な民族文化の存在から考えると、かなり多様な形態を示すことは容易に想像されるが、ここでは、問題の理解の便宜と資料の関係上、いちおう対象を水稲作村落に限定したい。

また構造の概念についても限定が必要である。構造という概念は、本来静態的なものであり、流動する社会の中に認められる規則的な社会関係や集団構成の形態を示すものとして使用されているが、それをどのような視点から捉えるかによって、分析の内容は種々異なってくる。ある場合には、それは生産力の発展段階との関連の上から捉えられる村落の階層であったり、また他の場合には、諸制度の複合的機能連関の記述であったりする。本論において問題にしたいのは、村落生活の「原組織」<sup>1)</sup>とも考えられるような社会組織の構造原理である。

このような観点からの村落構造の研究が最も活発に行なわれたところは、日本である。そこ

\* 龍谷大学文学部

1) 作田啓一『価値の社会学』岩波書店、1972、pp. 435ff.

で、まず、東南アジア村落との比較研究の方向を探索するために、日本における研究について触れておきたい。

日本社会における人間関係の基調は家連合であると指摘したのは、有賀喜左衛門である。彼によると、家連合とは、「日本社会で一つの生活単位としての特殊な役割を担う家が他の家と生活上の種々の契機について結合している共同関係をさす」<sup>2)</sup> ものである。この観点から村落構造を分析すると、日本の村落には、本家分家の系譜関係や上下関係による家連合と並んで、ほぼ同等の家の平等の関係による家連合が認められる。そこで、前者は同族結合、後者は組結合と呼ばれる村落構造の二類型が構成される。すなわち、有賀は日本の村落構造を「家連合の複合したもの」として捉えている。

有賀の村落構造類型論は、その後、福武直の「同族結合村」(東北型)と「講組結合村」(西南型)の二つの類型論、<sup>3)</sup> 磯田進の「家格型」村落と「無家格型」村落の類型論<sup>4)</sup> などにより、それぞれの狙いには多少異なるところはあるが、いっそう深められ、定式化されるようになった。しかし、これらの類型論は、いずれも対極的な二分法であって、村落の多元的様相を、「その個性に即して」<sup>5)</sup> 捉えるには不十分である。特に村落構造の比較の領域を日本民族の範囲外にまで拡大するためには、家の概念は、日本における特殊な概念のように考えられるから、別の尺度が必要である。

この点、蒲生正男による多元的な村落類型のための親族への着眼は、比較研究の領域を日本以外に拡大するのに役立つばかりでなく、村落構造の特殊個性的性質の把握に、新しい視角を導入した点で画期的である。親族は人間社会における普遍的な概念であるばかりでなく、人間の行動の方向づけや集団の形成に重要な役割を演ずるからである。<sup>6)</sup>

蒲生は、日本の親族集団を、出自の方向、権利義務の範囲、構成単位、婚姻形態を指標にして、次の四つの類型に分ける。<sup>7)</sup> マキ型は父系出自を強調し、系譜の本末関係に従った家の上下関係が親族集団内部の主従関係として存在する。この親族集団は同族団の典型的形態であり、東北地方に顕著に見られる。ジルイ型は、同族の範囲に隔差がある点において、マキ型とは異なり、擬制オヤコ慣行が親族集団の機能を代替する特色を持ち、中部日本から近畿、中国、四国、九州の内陸にわたり、かなり広い分布を持つことが予想される。イトウ型は父系出自であるが、個人が家によって類別されず、生得的な身分よりむしろ年輩の序列によって上

2) 有賀喜左衛門「村落共同体と家」『有賀喜左衛門著作集』未来社、1971、p. 125.

3) 福武直『日本農村の社会的性格』東京大学出版会、1949、pp. 34-48, 69-115.

4) 磯田進「村落構造の『型』の問題」『社会科学研究』3巻2号、1951.

5) 住谷一彦「村落構造の類型分析—研究史の動向によせて」喜多野清一博士古稀記念論文集編集委員会編『村落構造と親族組織』未来社、1973、pp. 268-269.

6) Fred Eggan, "Kinship — I. Introduction," *International Encyclopedia of Social Science*, Vol. 8, The Macmillan Company, 1968, p. 390.

7) 蒲生正男「親族」『日本民族学大系3』平凡社、1958、pp. 253-257.

下関係が規定される。したがって、しばしば年齢階梯制が付随する。その分布は、西南日本の太平洋岸に顕著である。地域的内婚の傾向が著しく、権利義務の関係は母=妻方の縁者にも父系親族と同等に拡大されているのが重要な特色である。ハロウジ型は父系出自にあらざる唯一の親族集団で、その報告の事例が少ない。奈良県(山辺郡都介野村)や奄美の事例は、ともにその地の開発がきわめて古く、しかも一貫して籾段に農耕を営んできたことを共通点としている。個人が家として類別されず、権利義務の範囲は多元的に拡大されているが、おおむね三世代に限定されており、同一世代の近親婚が顕著である。この型は奄美から沖縄にかけて分布しているものと思われる。

さらに蒲生は、親族集団の型を、上述の村落類型論と対応させ、同族型村落には、マキ型あるいはジレイ型親族集団が、講組型村落にはジレイ型、イットウ型、ハロウジ型などの親族集団が見られるとし、同族制社会にはマキ型が、年齢階梯制社会にはイットウ型がそれぞれ固有の親族集団を基盤としていることを指摘し、村落の階層秩序が、能力に応じて獲得できる獲得的階層秩序であるか、あるいは特定の身分に付随する生得的階層秩序であるかは、基盤となっている親族集団の性格と関連しており、前者にはイットウ型あるいはハロウジ型が、後者にはマキ型あるいはジレイ型の親族集団が基盤となっているという。

蒲生の研究の興味深い点は、親族集団構造の研究を通じて、日本村落構造の二分法的類型論の枠を破って、新しい類型(階層構造や年齢階梯制)の導入に成功したことや、研究の視野に奄美・沖縄までを含めることによって、比較研究の領域を拡大する可能性のあることである。蒲生の研究視角が、そのまま東南アジアの村落構造の研究に役立ち、日本との比較研究を可能にする座標軸を提供するかどうかについては、現在、筆者には不明の点が多いが、東南アジア村落構造の比較研究にも、親族構造のダイナミズムの理解が重要であるように思われる。

## Ⅱ 東南アジア村落構造の looseness の基盤

東南アジアの村落構造の類型も決して単純な図式で捉えられるものではないが、過去20年の間に行なわれた水稲作村落調査の結果には、一つの共通な問題が見出される。それは東南アジアの社会構造を特徴づける looseness の概念である。

この概念は最初、米国の人類学者 John F. Embree がタイ社会の構造を特徴づけるのに用いた概念であり、タイ社会の研究者の間で論議の的となったことは周知の通りである。<sup>8)</sup> この概念も tight に対極する二分法の概念であり、日本村落構造研究の二分法の対概念と同様に村落構造の多様性の解明のために、有効な用具とは思われないが、ここで問題にしたいのは、こ

8) Hans-Dieter Evers (ed.), *Loosely Structured Social Systems; Thailand in Comparative Perspective* (Cultural Report Series No. 17), Yale University, Southeast Asia Studies, 1969; 水野浩一「書評」『東南アジア研究』8巻3号, 1970,

の loose の概念がタイ以外の東南アジア村落の構造を特徴づける概念として、かなりの程度使用されている事実の背後にある意味である。

Embree は1930年代に日本の一農村（熊本県球磨郡須恵村）を intensive に調査し、第二次大戦後、米国の駐在官としてバンコクに滞在した。この時の生活経験から、彼は、タイ人の行為様式が日本人、中国人やヴェトナム人とは目立って異なることに気づき、日本の社会を tight な構造を持つ社会、タイ社会を loose な構造を持つ社会と形容したのである。<sup>9)</sup>

Embree よれば、tight な社会構造とは、人びとの行動が人間関係の規範的な社会様式に密着しており、その様式から個人が逸脱することは難しく、相互の互恵的権利義務が明白で、忠実に遂行されるような社会の構造である。その代表的な一例として、彼は日本の村落をあげる。日本の村は、村への定着・離村のためには、特別の儀礼が伴い、村人には一連の権利義務が課せられ、ある明確な輪郭を示す一つの社会的統一体である。村人は、外部に対しては、村の代表者としての責任を自覚し、村内での道路工事や葬礼の準備のような協同作業には、参加しなければならない義務を持つ。

これに対し、タイ社会においても、村は独自の統一性を保ち、村人はそれ相応の権利義務を所有しているが、それらは明確に規定されておらず、厳密に遂行されていない。相互交換の体系も漠然としている。村人の内外への地域移動はかなり頻繁で、村人には長期的に持続する義務感が乏しいので、日本の村で見受けられるような20年余りも継続されるような相互扶助組織（講）などは存在しない。家族生活においても、個人本位的行動が目立つ。父親は名目的な家長に過ぎず、子供達は両親に従うように期待されているが、実際には、日本などに見られるような両親に対する強い義務感は存在しない。夫婦関係もかなりルーズなものであり、それが必ずしも当事者にとって異常な関係とは考えられていないのである。<sup>10)</sup>

このような loose な構造や個人本位的な行動は、Clark E. Cunningham によれば、古くから（1882年）ビルマやタイ社会についても指摘され、クメール社会やセイロン島においても同様の指摘がなされている。<sup>11)</sup>

Embree は、タイ村落を特に調査してはいないが、中部タイの村落を調査した Steven Piker は、loose の概念はタイ村落の構造を説明するのに有効であるとして、次のように説明する。第1に、村境の不明確なことである。たとえば、親族結合、宗教的、経済的協同の関係が村境を越えて存在すること、教区や学区と村境の不一致、村全体の共同事業の欠如などである。第2に、村人の村に対する忠誠や帰属意識が目立って弱いこと、第3に、共同体的 (corporate)

9) John F. Embree, "Thailand — A Loosely Structured Social System," (*American Anthropologist*, 52, 1950,) in *op. cit.*, ed. by Hans-Dieter Evers.

10) John F. Embree, *ibid.*, pp. 5-8.

11) Clark E. Cunningham, "Characterizing a Social System; The Loose-Tight Dichotomy," in *op. cit.*, ed. by Hans-Dieter Evers, p. 106.

親族集団がなく、凝集力の弱い双系的親族 (kindred) の結合が存在すること、第4に、永続的社会集団が目立って少ないこと、第5に、個人間や家族間の経済的共同関係に永続性がなく、場当り的な dyadic な関係であること、第6に、集団への加入脱退は個人の任意性の問題であり、脱退を阻止する社会的規制がはなはだ弱いことなどは、タイ村落の loose な構造を示す主な特徴である。<sup>12)</sup>

さらに中部ジャワの農民の世界観<sup>13)</sup> をあざやかに捉えた C. Geertz も、中部ジャワの農村についてほぼ同様の見解を述べている。<sup>14)</sup>

「現在のジャワ人部落に、少しでも滞在する者に、最も強く印象づけるものは、人口の過密と貧困を除けば、村の中の生活の一般的な無定型性 (formlessness), 社会構造の漠然性 (vagueness) と個人間の絆のゆるさ (looseness) である。このことは、伝統的な諸制度が整然としていて明白に社会的行動を規制しているバリ島のようなところと比較すれば、特に顕著である。Robert Jay は……近郊村に1年間滞在して、村の生活について、次のように述べている。『村の中に見られるのは、私たちが都市近郊村に見るのと同じような自足的な核家族の並びや、100メートルしか離れていない農家との親密な個人的交わりの欠如、友情の絆帯のあいまいさや浅薄さ、生活の退屈なことである。』<sup>15)</sup> ジャワ人の村の規模は非常に大きく、行政組織は単純で、村人の連帯感は弱い。これらの点は、ごく大ざっぱな一般化であり、多分中部ジャワ全体に等しく妥当しないとしても、比較展望の観点からすれば、私は、その一般化は間違っていないと思う。私達がロマンティックに農民生活と結びつけて考える有機的で、共同体的で、ごく平穏な社会は、一般的に言って、今日のジャワ村落の特徴ではない。むしろ、村をよりよく特徴づけるものは、非常に効果的に協同し、または組織造りをするための能力の欠如、複雑な大事業を推進し、行なうための明確な方法のあいまいさから生まれる消極性や、ある意味での無目的性、つまり、不満や戸惑いによる不安定である。」

Geertz は、こうしたジャワ人村落の特徴は、オランダの植民地政策の強制栽培制度の所産であるように解釈しようとしているが、その解釈は的を射ているとは思われない。なぜなら、もしもそうであるとするならば、そのような強制栽培制度の行なわれなかった地域についての説明がつかないからである。

また日本の農村社会学者である二宮哲雄がルソン島中央部の村 (バタンス県タナワン町東ハ

12) Steven Piker, " 'Loose Structure' and the Analysis of Thai Social Organization," in *op. cit.*, ed. by Hans-Dieter Evers, pp. 62-67.

13) 拙稿「ジャワ人の世界観」『東南アジア研究』2巻1号, 1964; C. Geertz, *The Religion of Java*, 1960.

14) C. Geertz, "The Javanese Village," in *Local, Ethnic and National Loyalties in Village Indonesia, A Symposium*, ed. by G. William Skinner, (Cultural Report Series) Yale University, Southeast Asia Studies, 1969, pp. 34-35.

15) Robert B. Jay. "Local Government in Rural Central Java," *Far Eastern Quarterly*, 15 Feb., 1956, pp. 215-227.

ノボル村)を訪れた時の印象記は興味深い。二宮によれば、その村 (*barrio*) は多数の成員 (平均9名) を擁する家族によって構成されている。*kasamahan* とよばれる親族結合は強いのに、不思議なことに、日本で見られるような近隣集団がない。「まさかこれくらい都市から離れ、近代化もほとんど進んでいない村落で、社会構造が解体化しつつあるとは思われないが、あるいは、もともこの村落の社会構造は、ゆるく組み立てられているのであろうか」と村の本来の構造について二宮は問うている。<sup>16)</sup>

筆者もマレーシアのケダー州における村落調査で同様の印象を受けた一人である。上記の *Piker* の中部タイ村落の *loose* な構造についての記述は、ほぼそのままケダー州の水稻作農村の特徴として用いることができる。ただ、*loose* と *tight* の対概念では、両極間の度合が問題にされるのみであって、村落の特殊個性的な性質は明らかにされない。この点について、*Piker* の指摘は当を得ているように思われる。彼はタイの農民社会の一つの重要な社会的要素は双系的親族 (*kindred*) の存在であること、また *loose* と *tight* の対概念よりも、「非集合体志向の構造」 (*non collectivity-bound structure*) と「集合体志向の構造」 (*collectivity-bound structure*) という対概念が問題の理解のためには、より有効であるとする。

出自 (*descent*) を単系的 (*unilateral*) に、すなわち、父系的または母系的にたどる親族組織の存在するところでは、集団所属が一系的に決まり、超世代的な閉鎖的集団が形成されやすい。ところが、出自が父系と母系の双方において、ほぼ同等に重視される双系 (*bilateral*) 親族組織が特徴的な社会においては、親族関係は重視されても、排他的な超世代的集団は本質的に形成されにくいように思われる。もっとも、単系制と双系制には、いくつかの変種が存在するが、<sup>17)</sup> ここで指摘しておきたいことは、*Piker* も示唆しているように、*loose* な社会構造と双系親族は相互に密接に関連しているように思える点である。事実、双系親族の存在は、東南アジアに広く分布しており、タイ人、クメール人、ヴェトナム人、カンボジア人、マレー人、ジャワ人、ボルネオのイバン、陸ダヤク、フィリピンの多くの諸種族の民俗社会に認められる。

### Ⅲ 双系親族の組織原理

東南アジアの双系親族組織を検討するに当たり、筆者は北部タイ (岩田慶治、友杉孝)、東北タイ (水野浩一)、南部タイ (矢野暢)、フィリピン中部平野 (高橋彰)、マレー半島東北部 (坪内良博)、マラカ (前田成文)、中部ジャワ (H. Geertz, Robert Jay) の調査報告を主に参照

16) 二宮哲雄「フィリピン農村を訪ねて」『農業と経済』36巻9号, 1970.

17) G. P. Murdock, "Cognatic Forms of Social Organization," in *Social Structure in Southeast Asia*, ed. by Murdock, 1960, pp. 1-14; 馬淵東一「沖繩社会研究の展望」『馬淵東一著作集』第1巻, 社会思想社, 1974年, pp. 560-564.

したが、<sup>18)</sup> それを詳細に比較分析する時間的余裕がないので、以下、主に筆者のマレーシアにおける村落調査資料を中心に考察したい。

通常、双系家族には圧倒的に夫婦と未婚の子女から構成される小家族が多い。筆者のマレーシアにおける調査村（ケダー州パダンラン村）においては、180戸中118（65.6%）が、この種の小家族である。ところが、村の中には、一つの屋敷地内に親夫婦と子供夫婦とが別棟に居住するいわゆる「複世帯」と呼ばれる家族形態を構成している世帯の集合が多く見出される。日本に見出せる「複世帯」制とは、「一家が同じ部落、一つの屋敷地内におりながら、その直系親族までが夫婦単位に棟をわかち、煮焚きを別にし、多少とも生計単位としての独立性を持った世帯に分かれて暮らす慣習である。」<sup>19)</sup> この慣習は、日本においては、蒲生の指摘したハロウジ型のような双系親族の傾向の強い地域に見出されるようで、村武は、その分布はだいたい千葉、伊豆諸島、神奈川から東海道、志摩から瀬戸内海、四国、九州とその沿海諸島や奄美というように日本の西南地域、特に日本の沿海漁村に多く見られるという。<sup>20)</sup>

東北タイの水野の調査地にもこの種の世帯の集合が多く、彼は、それを「屋敷地共住結合」と呼んでいる。<sup>21)</sup> ケダーの村落においても、180世帯のうち、127世帯は2～7世帯にわたり48の屋敷地に共住している。<sup>22)</sup>

家族を世帯と同義に捉えるならば、双系家族の目立った特徴は、いわゆる核家族ともいえようが、大間知のいうような「複世帯」を一つの家族形態として捉えるならば、双系家族は核家族的な小家族を、その主たる特徴とするという考え方は、必ずしも妥当なものといえない。そこで問題になるのは、世帯と家族の定義である。この定義に関して、村武は、興味深い問題を提起している。

村武は、家族がかなり明確な集団として捉えられる単系制の場合と異なり、双系制の場合、家族の範囲は非常に plasticity に富んでいて、明確な集団として捉え難いことを指摘し、家族を集団として規定する一般的な考え方に疑問を提起している。彼によれば、「<世帯>とは近親

18) 岩田慶治「インドシナ半島北部におけるタイ諸族の家族と親族—タイ・ヤーイ族、タイ・ヌーア族、タイ・ルー族社会の比較」『民族学研究』29巻1号、1964；友杉孝「ムバーン・サンカプトングー北タイの稲作農村」大野盛雄編『アジアの農村』、東京大学出版会、1969年所収；矢野暢「南タイにおける通婚圏の形成」『東南アジア研究』7巻4号、1970；水野浩一「タイ稲作社会の成立と構造」石井米雄編著『タイ国一ひとつの稲作社会』創文社、1975所収；高橋彰「バリオ・カトリナン—フィリピンの稲作農村」大野盛雄編『前掲書』、1969所収；高橋彰「フィリピンの価値体系」『東南アジアの価値体系第4巻』、現代アジア出版会、1972；口羽・坪内・前田共編著『マレー農村の研究』、創文社、1975刊行予定；H. Geertz, *The Javanese Family*. The Free Press, 1961；Robert Jay, *Javanese Villagers*. The MIT Press, 1969.

19) 大間知篤三「家族」『日本民俗学大系3』平凡社、1958, pp. 220ff.

20) 村武精一「最近試みた共同調査から—民俗学と社会人類学—」『日本民俗学大系月報』7号、1959, p. 5.

21) 水野浩一「上掲論文」, p. 65.

22) 口羽・坪内・前田共編著『上掲書』所収の筆者の論文に、詳細は述べておいたが、この種の世帯群の中には、血縁関係のない世帯も含まれている。



になる。このように、双系家族は親子関係や婚姻関係を通じて相互に交錯するので、その範囲が漠然としたものになる。相続は原則的に均分相続であるが、個人は男女を問わず、たとえ婚姻後独立した世帯を持ち、親から遠く離れて住んでも、また親が離別・再婚しても、実の親子関係に変化はなく、個人の相続権や成員権を喪失することにはならない。このような相続権や成員権があるところから見れば、家族は単なる社会的カテゴリーではなく、一つの組織を持つ実体であると考えられるのであるが、それが交錯しているために、その集団としての境界が判然としないのである。双系家族のこのような性質のために、前田成文は家族圏 (family circle) という用語を用いている。<sup>24)</sup>

以上のような双系家族の性質は、双系制社会における世帯の家族的構成の多様性を理解する上に極めて重要である。世帯の構成員の中には、非血縁者がかなり含まれる事例が多い。特に離婚・再婚の比率が比較的高いマレーシアや中部ジャワにおいては、孫や、親と死別した孫、また親の離別再婚によって残された孫、死亡した実の父親の後妻、配偶者と離・死別した子、死亡したきょうだいの子などを引き取っている世帯が少なくない。配偶者と離死別した子や孫が親や祖父母と容易に同居できるのは、彼らがたとえ親や祖父母から独立した世帯に住んでいても、同じ家族の成員権を保持しているからである。同一家族の成員であるという意識は通常親・子・孫の三世代の間で認められるが、この範囲は日常生活における関係の濃淡によって種々変化する。

双系家族の枠が必ずしも明確でないことは、家族内における個人の独立性が相対的に強いことを意味する。この個人の独立性の強さは、家族生活のあらゆる側面に認められる。財産はあくまで個人の所有物であり、夫婦が共同で入手したものを除き、夫婦個人の所有物は明白に区別されている。親の財産は原則として子供の間で均分されるが、親が死亡するまで、その処分権は親にある。マレーシアの場合は、この点が他地域よりも明白で、親・子間の地主小作関係は珍しくない。親子きょうだい、一つの共同経営体を構成し、一人が代表者として財を共同管理する例はなく、きょうだいの一人が共有名義の土地を管理する場合、それはあくまでも、他のきょうだいによる委託管理である。

また、親は子供の財産に干渉することではなく、貧しい農家においても、子供が自分の収入を親に手渡すことはない。逆に親が自分の財産を浪費しても、子供がそのために親を恨むことはない。妻子が雇用された者と共に、自分の家の田植えや刈り入れを手伝う時には、夫は妻子にも雇われた者と同様に賃銀を支払う。このように同じ家族の親子きょうだいの間にも、ある程度の距離があり、家族成員が集団としての家族を世代を越えて永続させるために献身するという考え方は全くといってよいほど見られない。

24) Maeda, Narifumi, *The Changing Peasant World in a Melaka Village, Islam and Democracy in the Malay Village*. Ph. D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Chicago, 1974, pp. 47ff.

タイには、親の扶養のために末娘残留の傾向が強いが、それは必ずしも制度化されたものではなく、子供の間で誰が親を扶養するかは、本質的に子供の経済力や意志の問題である。きょうだい間には、性別に関係なく、長幼の序列が存在するが、親の財産の分与や親の扶養にかんしては対等の関係にある。独立が可能となれば、子供は親から独立した世帯を持つが、子供の少ない家では、好んで養子 (*anak angkat*) を迎える。養子は養父母の財産を相続する権利はないが、養子を世話すれば、自分も世話をしてもらえるとという気持ちが養父母に強い。養子は家督の相続のためのものではないので、一般には、幼い子供の養子が多いが、養子は成長すれば、養親から離れて行く例が多い。

家族の範囲を越えた双系親族関係は、きょうだいの関係にたとえられ、*kindred* の言葉に「きょうだい」 (*adek beradek*) が用いられる。だいたいふたいとこまでの間柄が近い親族 (*adek beradek dekat*) と考えられている。近親者は、通常近くに居住するから、近隣の者は親族である場合が多い。近い親族同志には、明白な互恵的な義務の関係はないが、相互に甘えが許容され、相互扶助が期待されている間柄である。家屋を建てる土地を持たない時には、個人は近親者の屋敷地に家屋を建てさせてもらう。このようにして、おじ、おば、甥姪やいとこ、ふたいとこなどの世帯が一つの屋敷地内に別棟を建てて住む例は珍しくない。しかし、この場合でも、屋敷地の所有者は明確であり、これらの親族が財を共有して単一の排他的な経営体となることはない。

双系制の *kindred* は、あくまでも個人を中心にした (*ego-oriented*) な関係のネットワークであり、どの親族と親密な関係を持つかは、たとえ近い親族同志であっても、個人の選択意志の問題である。あくまでも個人と個人間の個別的な *dyadic* な関係の問題である。この関係はきょうだい関係のように、本質的に対等な互恵関係である。したがって、この互恵関係において、対等性を維持することができない場合には、個人は、近い親族といえども、何かを頼みに行くことを恥 (*malu*) とする。この恥の感情が一方において、近い親族に過度の依頼心を起こさせることを抑制し、親族関係の安定性を支える機能を果たしているように考えられるが、他方において、関係を持つ相手の選択を方向づける働きをも演じているように思われる。

このように自己を中心とした *dyadic* な関係が強い場合の集合体の性質は、ある時点における個人と個人の関係の濃淡の度合に依存する一時的な性質が強い。共同で何かが行なわれる場合には、ある個人を中心に、その個人と直接に親しい間柄にある親族、近隣の者や友人が集合するのであって、特定の親族とか近隣の特定の範囲の者のみが永続的な形で、集団を構成するのではない。Robert Jay は、このような集団を *dyadic group* と呼んでいる。<sup>25)</sup> 双系親族の組織原理は、*ego* を中心にした *dyadic* な関係による集合と特徴づけられよう。

村落生活のあらゆる側面における集合体も、この *dyadic group* である。村人が人生の折日

25) Robert Jay, *op. cit.*, 1969, p. 189.

折目に行なう共食儀礼 (kenduri) への招待, 家屋を建てる時の相互扶助, ゆいのような相互扶助, 葬式講 (sharikat mati) や什器講 (sharikat pinggan mangkok) のような相互扶助組織, 農業共同組合など, いずれも dyadic な関係によって行なわれる。したがって, このような集団活動に参加する者が近隣の者でなかったり, 村外の者であっても, 全く不自然ではないのである。毎年の農業の仕事仲間が違っていても, 村人にとっては当然のことである。

このような社会においては, たとえ表面的で誠意のない浅薄さを感じさせるとしても, dyadic な親睦の感情を常に再確認することは, 非常に重要な慣習 (adat) である。dyadic な関係の和合, 調和が強調されるのもこのためである。

以上は, 東南アジアにおける loose な村落構造は, 双系親族と密接な連関を持つ点について, 気づいた若干の事柄を述べたにすぎない。村落の階層やリーダーシップのあり方も, 双系制との関連において, ある特徴を持つように考えられるし, また, タイの双系制は母=妻方の傾斜が強いように, 双系制それ自体にも, さまざまな variations が考えられる。ジャワの水稲作村落においては, 双系制の存在する村落にも, 双系親族による土地の共有集団 (corporate group) や近隣組織が確立されている村もあるといわれている。このような variations を説明できる原理の解明が東南アジア社会の性質を理解する上に重要な一課題であるように思われる。